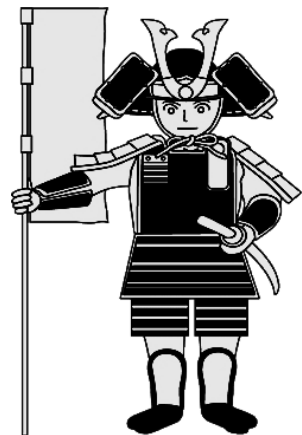


第32回



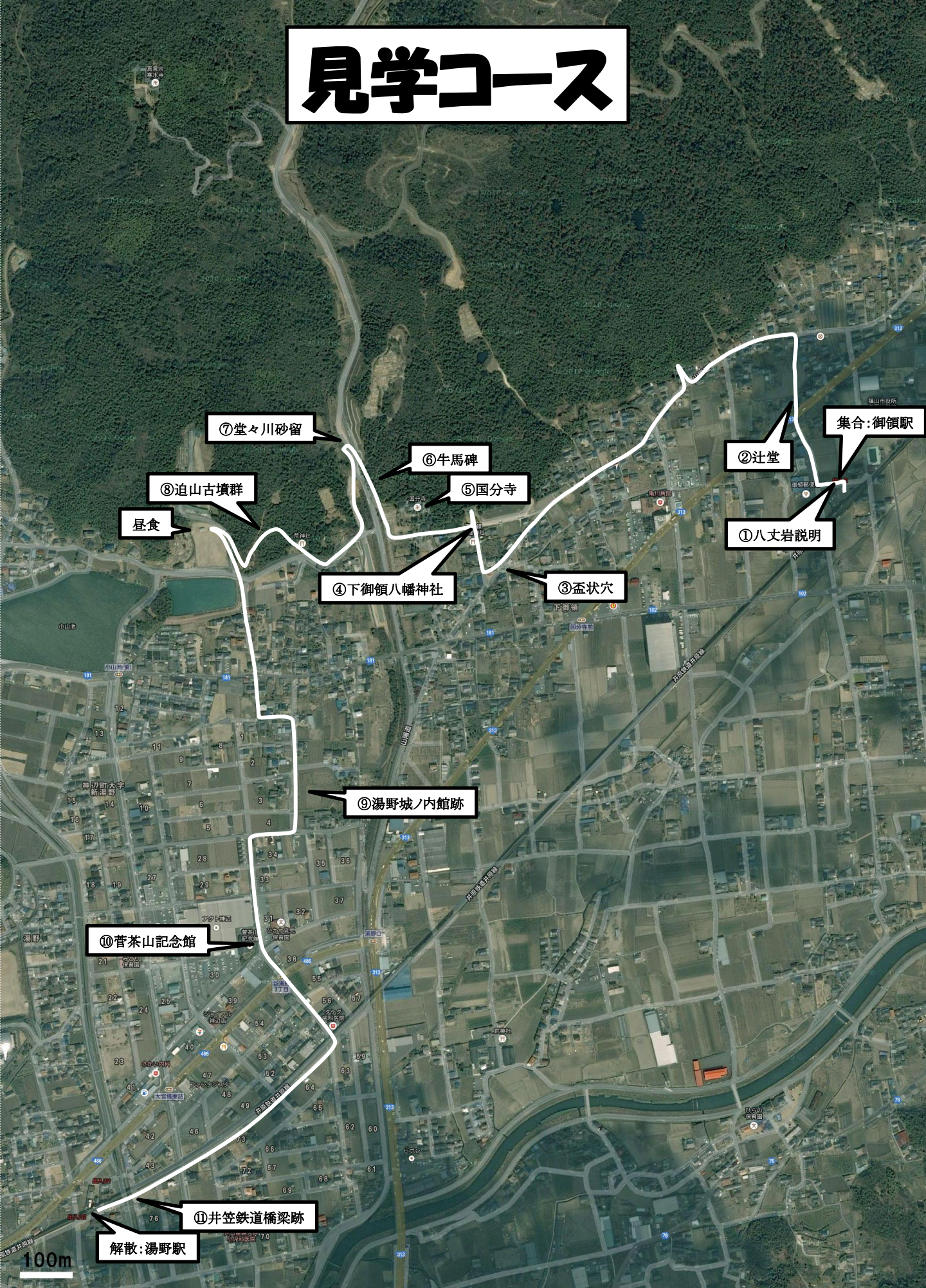
親と子の 歴史ウォーク



2014年5月5日

主催：備陽史探訪の会
後援：福山市教育委員会

見学コース



集合:御領駅

②辻堂

①八丈岩説明

③盃状穴

⑨湯野城ノ内館跡

⑩菅茶山記念館

⑪井笠鉄道橋梁跡

解散:湯野駅

⑦堂々川砂留

⑥牛馬碑

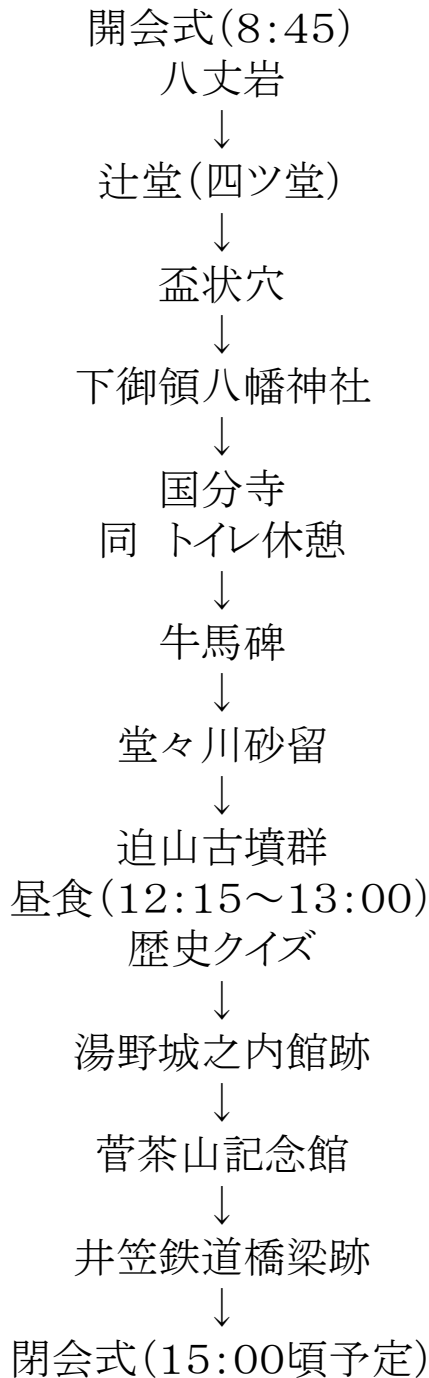
⑤国分寺

⑧迫山古墳群

昼食

100m

スケジュール



参考

井原鉄道井原線の時刻(3時台は以下の電車のみです)

福山方面 湯野駅(15:20)→神辺駅(15:44)

井原方面 湯野駅(15:38)→井原駅(15:50)

国分寺から井原市の高屋にかけての細長い平野の北にそびえる山を一般に「御領山」と言います。

一つだけの山ではなく、複数の山の総称で、その一番高い山が「八丈岩」と呼ばれています。

標高は234メートル余りで、山頂一带に大きな岩がごろごろ転がり、その最も大きな岩が「八丈岩」と呼ばれ、近くには「千人隠れ岩」等の奇岩が点在しています。

つじ だう 辻堂(四ツ堂)

◎辻堂、四ツ堂、憩亭などとよばれ、四本柱、四方吹放の簡素な建物で、昔よく人が行きかっていた道沿いに見られます。

◎江戸時代、旅人の休憩所として利用されていました。また村人の信仰や親睦の場になっていました。

ポイント1…数の多さは、やっぱり自慢！？

ポイント2…どうして、残ってるの？

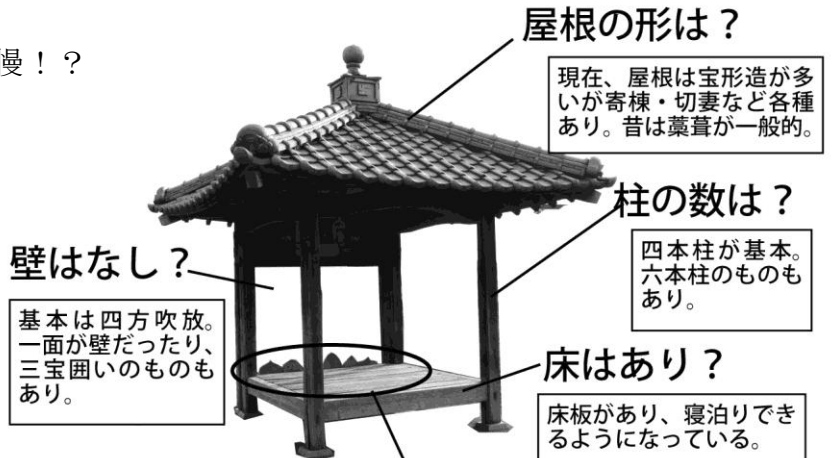
ポイント3…いろんなものがあるネ！

古くから信仰の対象とされたようで、山頂西側には弥生時代の甕棺かめかんや土器が出土する遺跡があります。

また、伝説も残っています。

「御領山の山頂には栗の木がたくさん茂っていた。向かいの権現山は岩山。それぞれ鬼がすんでいた。ある時、山の高さのことでケンカになった。八丈岩の鬼は栗を権現山の鬼は岩を投げあつた。御領山は岩だらけ 権現山は栗山。御領山は岩のぶんだけ高くなった。」

◎1984年(昭和59年)に「安芸・備後の辻堂の習俗」が「記録作成等の措置を構すべき無形の民俗文化財」に選択されました。辻堂は広島県下では東南部(備後地方)に集中しています。



牛馬碑を探せ！

堂の内部や背後・横に、牛供養地藏が並んでいる。他にも石灯笼や、道標・五輪塔や宝篋印塔の残欠や地神様などがある場合も。時代と共に、周囲から堂内に持ち込まれることが多いようだ。

盃状穴

いつの頃からか、石の表面に穴を掘って、中に水や酒、米や麦などを入れて神様や仏様に願い事(願掛)をする風習がありました。

この穴を盃状穴(盃の形に掘られた穴)といいます。

掘られている場所は、狛犬、灯籠の台座、石段、手水鉢、墓石、自然石などです。

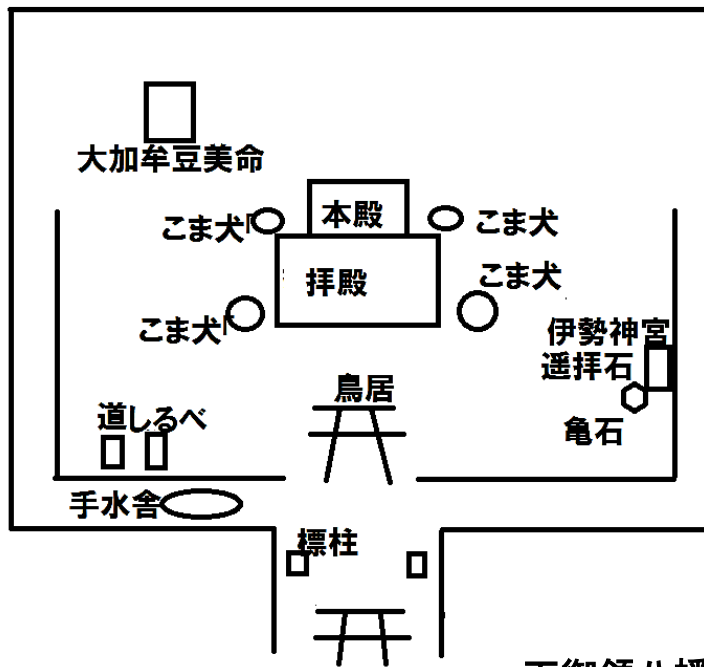
大きさも様々で直径2~3cmから10cmくらいのものまで様々です。1ヶ所にたくさん掘ってあるものもあります。

明治時代に造られた石造物にも掘られたものがあります。ヨーロッパ、シベリア、中央アジア、朝鮮半島でも見つかっています。

下御領八幡神社

○神社の由来・・・奈良時代に国が栄えるようにとの、天皇の願いによって全国に国分寺が建てられました。この神社は、隣の神辺の国分寺の守り神として建てられました。その後、室町時代に戦いで焼けましたが神辺城の城主によって再建されました。本殿の床下には「永正四年(1507年)」という、その時代の年号

が書かれた柱が残っています。その後も、この地方に勢力をもった武将たちがお参りして、しだいに大きな神社となりました。江戸時代には大水害で建物が壊れましたが、福山城の城主・水野氏によって修理されました。



下御領八幡神社境内配置略図

○おまつりされている神様

第15代目の天皇の応神天皇と、そのお母さんである「神功皇后じんぐうこうごうと田心姫命たごりひめのみこと、湍津姫命たぎつひめのみこと、市杵島姫命いちきしまひめのみこと」。

○神社のおもな石造物と建物

- ・標柱しめばしら・・・神社に向かっている道の両側に建っている石の柱。ここからは神聖な場所という意味です。
- ・鳥居・・・二本の石の柱が少し内側に傾いて、上でつながっています。鳥居の形は地図では神社のしるしとなっています。この神社には二本たっています
- ・手水舎てみずしゃ・・・神社にお参りするときには最初にこの中の水で両手と口を清めます。
- ・亀石かめいし・・・亀はマムシから守ってくれるといわれます。
- ・伊勢神宮遥拝石いせじんぐうようはいし・・・この方向が三重県の伊勢神宮の方向なので、ここで手を合わせておがむことがあります。伊勢神宮は天皇の先祖をおまつりしている神社です。
- ・拝殿はいでん・・・神社にお参りしてお祈りをするのは拝殿の前です。1960年(昭和35年)に新しく建てられました。拝殿の前では「二礼二拍手一礼」といい、二回おじぎをして、二回両手を胸の前でたたき、もう一度おじぎをします。
- ・本殿・・・神様がまつられている建物です。1926年(大正15年)に大きな修理をして、今のような銅板の屋根になりました。
- ・こま犬・・・拝殿と本殿の、向かって右と左に見ることができます。右側は口を開いており、左側は口を閉じています。近づいて観察すると、下の台にはつくられた土地のことなどがきざまれています。

おお かむず みの みこと

・大加牟豆美命・・・桃の実が悪者を退治する力があるといわれて、神様として敬われています。

・道しるべ・・・「右石州せきしゅうぎんざん道」「左九州をうかあん」と刻まれている石の柱。古い時代の山陽道に面した場所に建ててあったのですが、いつの頃かここに移されています。山陽道は京都や大阪と九州を結ぶ重要な道路で、神辺町の中を通っていました。

石州とは島根県のことです。「大森銀山」があり、銀が掘り出されていました。銀は、江戸時代にはお金を作る材料にもなっていました。「石州ぎんざん道」は、銀を取引する商人たちが大阪方面から神辺を通過して、このあたりから山陽道から分かれて大森銀山まで通った道でした。

○私たちの生活と神社とのかかわり

豊かな収穫を神様に感謝する秋祭り、こどものすこやかな成長をねがう七五三などのお宮参り、今年一年の幸せを願う初もうで、受験の合格をおいのりするお参りなど。

○いろいろな神社

八幡神社のほか、稲荷神社、天満宮、巖島神社、吉備津神社など、ほかにもたくさんあります。

備後国分寺跡

てんびょう

奈良時代の天平13年(741年)、聖武天皇は、全国に国分寺をつくることを命令しました。

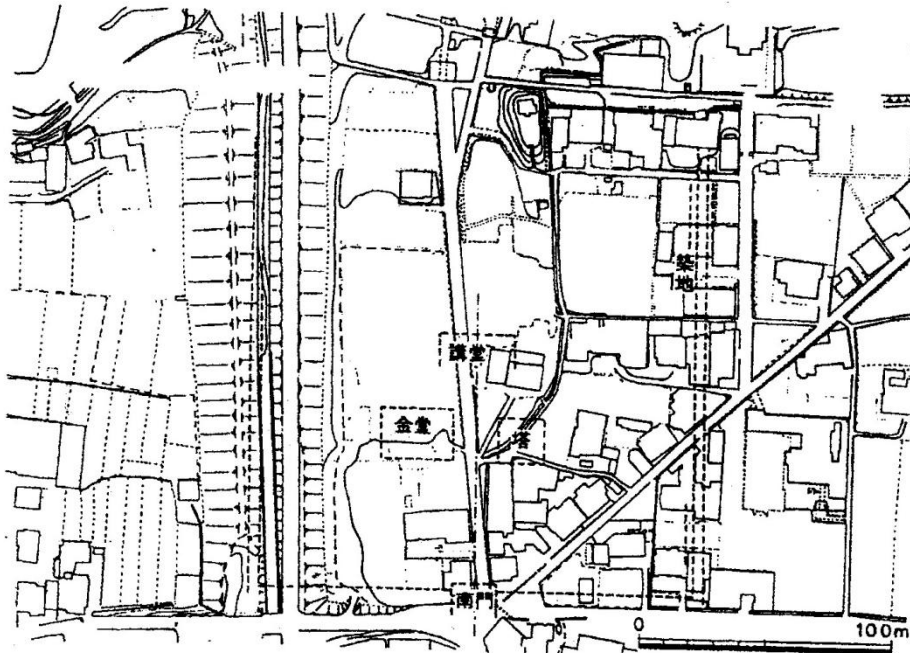
当時、神辺町を含む地域は「備後」と呼ばれていましたが、この備後国につくられた「国分寺」が今私たちの立っている場所です。

ちなみに、現在のお寺の建物は奈良時代のものではありません。当時の建物はすでに無くなっていて、皆さんの足元、地下にその痕跡が「遺跡」として残っています。

さて、当時の国分寺は、日本の国が平和であることを祈る役割(この役割を「こっかちんご国家鎮護」といいます)をもっていました。

そして、当時のお寺の様子がどのようなものであったのかは、昭和47年(1972年)度から何度か行われた発掘調査によってわかってきました。調査結果によると、お寺の広さは東西約180mあり、その中に、塔・金堂・講堂などが建てられていたのです。

また、南門の跡も見つかっていますが、この門は古代の主要な道路であった「山陽道」に面して開いていたと考えられます。このお寺が、備後国の重要なお寺であったことが想像できます。



備後国分寺伽藍配置推定図

牛馬碑

現在のように機械がなかった時代、田畑を耕したり荷物を運んだりしたのは牛や馬でした。人と共に働いてくれた牛や馬が亡くなると、人々は感謝の気持ちを込めて供養碑を建てました。

国分寺の西側にはその供養碑が50体ほどあります。

ヤギ、犬、ニワトリの碑もあります。その中に4頭とか6頭の牛や馬が彫られたものがありますが、これは「万人講」といって、多くの人達と一緒にあってそれまでに亡くなった牛馬の供養をまとめて行ったものです。なお、牛馬の碑はこの周囲の辻堂などにもあります。

堂々川の砂留

この川を「堂々川」といい、一番から六番まで砂留があり江戸時代中ごろの「安永2年(1773年)」に造られたものです。一番大きな砂留は六番砂留でこの場所は「堂々公園」になっています。

砂留とは「砂防ダム」のことで、大雨によって土や砂・石などが水といっしょに土石流となって下流の平野に洪水になって流れ何度も被害を出しました。こうした被害から平野や家を守るために造られたのです。

「延宝元年(1673年)」には国分寺も流され、63名の犠牲者が出ました。

その供養碑がこのお寺にあります。砂留は何度も高くし明治になってからも工事をしています。

六番砂留の上流にまだ二か所あります。他の場所にも砂留は多くあり、その中でも「別所砂留」は最近分かった砂留で注目されています。

一番砂留の下に見えるのは明治15年にできたもので後に「0番砂留」とも言われています。



図:「がらくたのホームページ」(<http://k-yagumo.sakura.ne.jp/web3/kannaberekisi.htm>)より

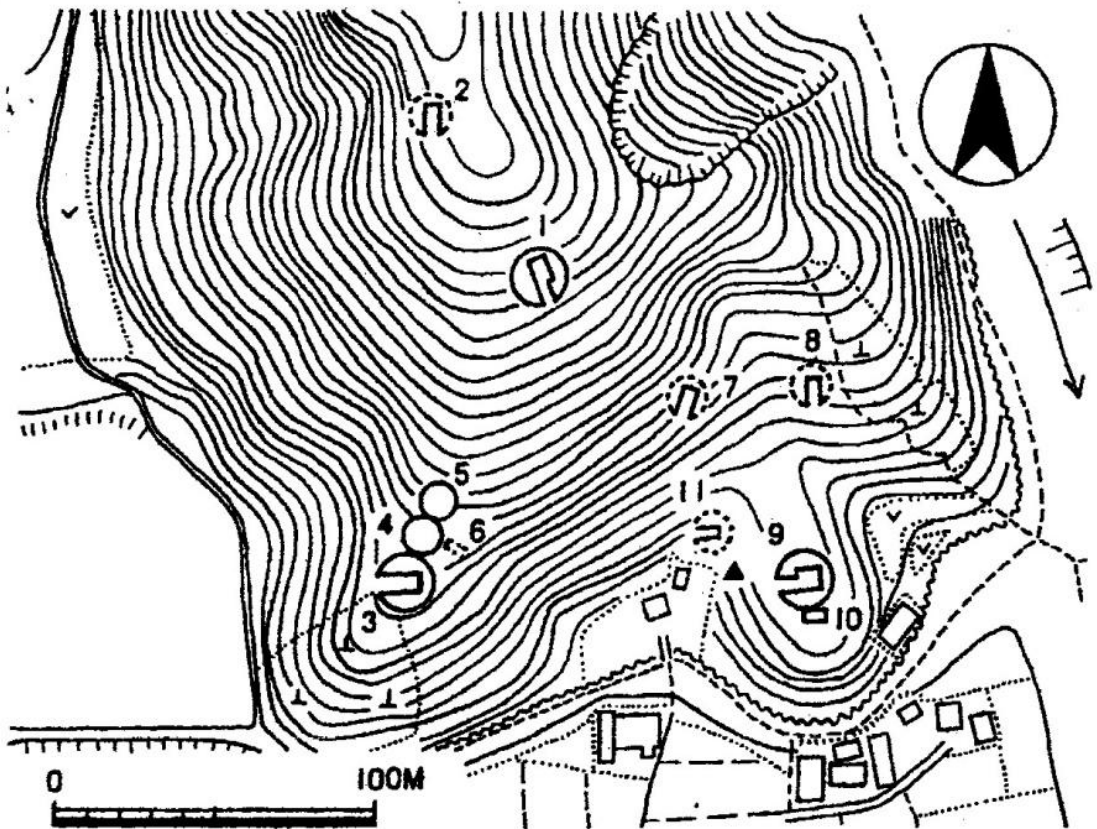
迫山古墳群

標高84mの丘陵の南側斜面につぎつぎとつくられた古墳群です。死者を「横穴式石室と呼ばれる部屋に葬ったものや、板状の石を組み合わせでつくった「箱式石棺」という棺を使ったものなど、全部で11基の古墳がみつかります。

そのうち、昭和60年に発掘調査を行った第1号古墳は、円墳というから見た形が丸いお墓です。大きさは、直径19m、高さ5mです。石室(遺体を葬る施設)の長さは、古墳と石室とをつなぐ通路の部分(羨道せんどうといいます)を含めて11.6mもあり、広島県内で最大級の大きさです。

この石室からは、武器類(珍しいデザインの刀がみつかります!)のほかに馬具、装身具(身に付けるアクセサリーなど)や土器(ネズミ色をした硬い焼き物の「須恵器」と、黄褐色のやわらかくて壊れやすい焼き物「土師器」)などがみつかりました。

迫山第1号古墳は、今から1,500年以上前の6世紀末ごろにつくられたと考えられていますが、大和政権と政治的に強い結びつきのあったリーダーのお墓といえます。



図：脇坂光彦編「探訪・広島のお墓」1991年 より

ゆ の しろ の うち やかた あと
湯野城之内館跡

神辺町湯野に残っている中世豪族の屋敷跡です。長方形の屋敷地を堀跡と思われる細長い田んぼが取り囲んでいます。

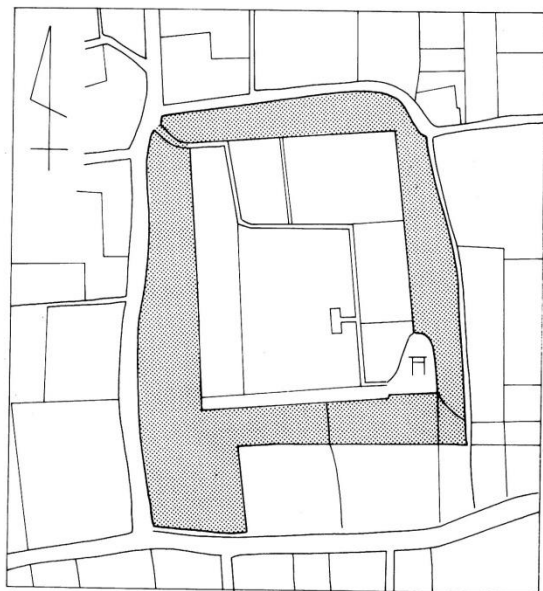
広島県内の館跡を調査した「広島県中世城館遺跡総合調査報告書」には記載されていますが、説明されないと、実際に現地を見てもよくわからない状態です。

神辺町内には、他に鮮明に遺構が残っていて一般の人が見てもそれと解る館跡は各所にあります。

この館跡の住人については、よくは解りませんが江戸時代に書かれた書物によりますと

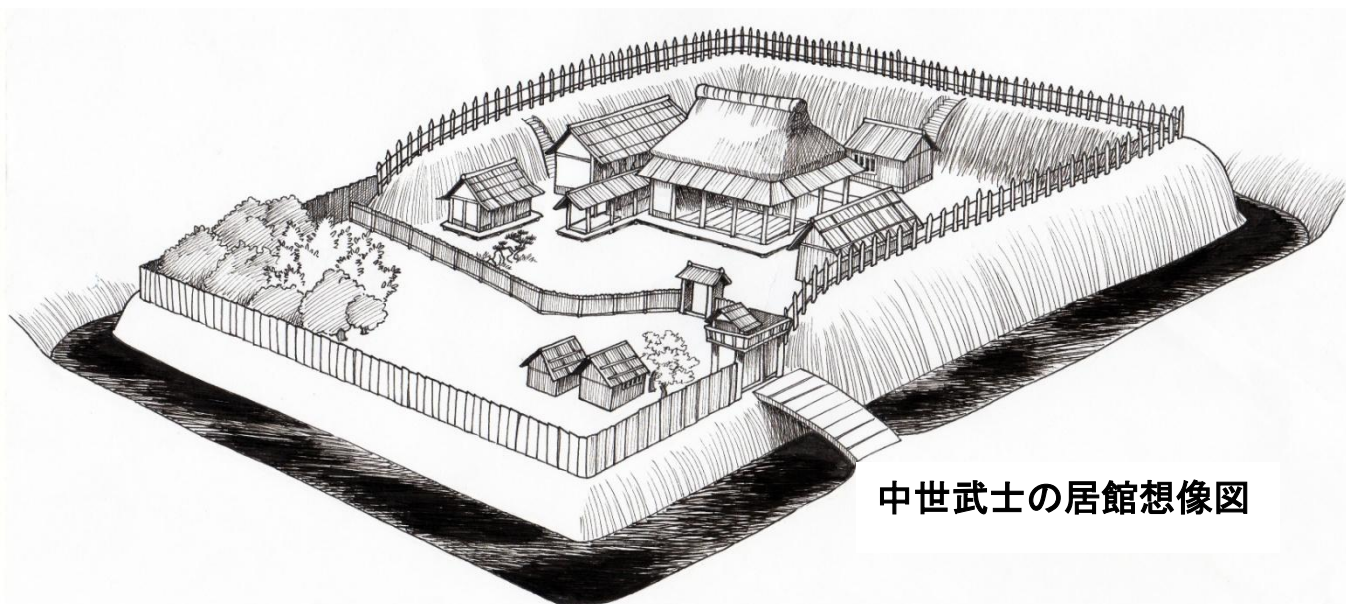
「鳥井兵庫頭」の屋敷跡と書かれています。しかし鳥井兵庫頭が実在していたかどうかは、証明できていません。

なお、各地に残る多くの中世の館跡と云われる遺跡の住人について、江戸時代から明治時代にかけて書かれた書物では具体的人名を書いてあるものが見られますが、史料によって証明されていない人がほとんどです。



湯野城之内館跡略測図 (S=1:2,000)

(アミ目は堀跡推定範囲)



中世武士の居館想像図

菅茶山

江戸時代の終わりに入ったころ、神辺で活躍した菅茶山は日本を代表する教育者・詩人です。

茶山は地元の若者だけでなく、全国各地から集まってきた若者たちに寮生活をさせながら儒学(中国から伝わった学問)や漢字で作った詩(漢詩)などを教えていました。

その場所は神辺町川北にある現在、国の特別史跡となっている「廉塾ならびに菅茶山旧宅」です。

井笠鉄道橋脚跡

明治時代末ごろから、全国各地に軽便鉄道とよばれる簡易的な鉄道が数多く作られるようになりました。福山では、鞆軽便鉄道(福山⇄鞆町)、両備軽便鉄道(福山⇄府中)、そして、1922年(大正11年)に両備軽便鉄道の支線として、神辺と高屋(井原市)までを結ぶ「**両備軽便鉄道高屋線**」が建設されました。

また、井原から高屋にかけては「**井笠鉄道高屋線**」が建設され、両備軽便鉄道の高屋線と接続し、井原まで直通運転が行われました。

しかし、両備軽便鉄道の本線は1933年(昭和8年)に国有化され「福塩線」となったため、国有対象から外された高屋線のみが「**神高鉄道**」として民営のまま運行が継続されることとなります。

ですが、わずか7.8kmの路線ですので、単独での事業運営は早々に困難となり、神高鉄道は井笠鉄道に吸収され、1940年(昭和15年)に「**井笠鉄道神辺線**」として再出発しました。

こうして、神辺線は地域の公共交通機関として定着しましたが、自動車の普及により乗客数

こうよう せきようそん

茶山の学校は初めは私立で「黄葉夕陽村舎しゃ」とっていましたが、黄葉夕陽村舎はのち、福山藩に認められて福山藩の学校となり、「神辺学問所」あるいは「廉塾れんじゆく」と呼ばれるようになりました。

さらに茶山は自分が作った二千四百首余りの詩集「黄葉夕陽村舎詩」を世に出して当時のベストセラーとなり、茶山の名は全国に知れ渡りました。

が減少したこともあり、1967年(昭和42年)、井原と神辺を結ぶ正規の鉄道「**国鉄井原線**」の建設用地として廃止・買収されました。

